

オピニオン

困窮家庭に無償で食品



困窮家庭に届ける食品の計画作業などを行う学生=4月17日、吉備国際大

4月中旬の平日、吉備国際大(高梁市伊賀町)の倉庫内にある作業場。学生が段ボール箱の重さを計量器で量った後、別の学生が重量をファイルに入していく。米、レトルトカレー、ミルク、缶詰、チョコレート…。箱の中身は飲食物だ。

大学を運営する学校法人順正学園の名を冠したボランティアセンターが展開している、生活困窮家庭に無償で食料を届ける事業「デリッシュストックキッズクラブ」。全国の食品会社・スーパー、コンビニエンスストアやファードバンクから寄付を受けた高梁・岡山・倉敷・総社の4市のほか、学園が運営する大学がある岡崎県の5市町の家庭に送付。2023年度は延べ1540世帯に17・7㌧の食品を届けた。

支援するのは中学3年以下の子どもがいる生活保護を受けている家庭。約20人の学生ボランティアが食品の保管、種類や賞味期限などの分類、利用者の食物アレルギーの確認、梱包、月1回の発送などを担っている。

学園創立50周年記念の一環で事業がスタートしたのは15年度。生徒保護に至る前に家計の再建を後押しする生活困窮者自立支援法が施行された年でもあった。ボランティアセンターの吉井敦子参与(71)は「われわれの支援がセーフティーネットになれば」といって活動してきた」と振り返る。

国統計では国民の約6人に1人が貧困状態にあるとされる。「食べ物に困っている家庭が身边にも存在することを知つて驚いた」とボランティアセンターでリーダーを務める社会科学院3年生田春輝さん(20)。学生にとって格差社会の実態に触れる機会にもなつていて、センターでは家庭や事業所で余った食品を集めて有効活用する。

「ファードライブ」も定期的に実施。23年度は子どもへの食料支援で連携協定を結ぶ高梁、総社市の商業施設などに回収用の専用ケースを設置し、学生が買い物客らにチラシを配って協力を呼びかけた。

事業開始から8年余、支援の輪は着実に広がっている。食品を寄付してくれる企業・団体の数は現在40を超える。当初の3倍。趣旨に賛同した国際ソロプロミスト高梁や高梁ロータリークラブは食品の箱詰め作業などに協力している。いつも子どもたちに悲しい思いをさせているけど、箱が届くと笑顔でいっぱいになる♪ 食料支援を受けた家庭からボラ

ンティアセンターに寄せられた手紙。心理学部4年中山愛さん(21)は「自分たちの活動が感謝されることはうれしいし、励みになる」とセンターの仲間の思いを代弁する。吉井参与は「学生の若い力と地域の力を借りながら、これからもサポートが必要な家庭に手を差し伸べていきたい」。互いが支え合う社会の実現に貢献する。

(小川正貴)



ファードライブ活動で買い物客にチラシを配って協力を呼びかける学生=昨年11月、高梁市

池田範子課長

隠れた声にも耳澄ませる

順正学園ボランティアセンターと食料支援事業で連携する高梁市こども未来課の池田範子課長(52)に、困窮家庭の現状や活動内容について聞いた。



センターとともに支援しているのは、1人親家庭などで生活保護を受けるまでには至らないものの、子どもの食事に困っている世帯だ。相対的に母子家庭が多い。順正学園と市は2015年に子どもの食料支援で協定を結んでおり、こども未来課では児童扶養手当の現況届を受け付ける際などに保護者と面談を行い、食料支援について説明。家庭が支援を希望すれば、收入など詳しい状況を聞き取って申請書を提出してもらい、センターに橋渡ししている。家庭によっては支援を申し出しづらい状況がある。陰に隠れた声にも耳を澄ませながら高梁での子育てをしっかりサポートしたい。

**知を生かす
地域と大学**

順正学園ボランティアセンター

これまでに高梁市、吉備中央町の高齢者グループやボランティア団体の会合で「上演」し、好評を得ている。ユニークな活動は県の関係者の目に留まり、今春には闇バイトの危険性を訴えるチラシの制作も依頼された。

「レッド」役の社会科学院4年仁田涼介さん(21)は「少しでも特殊詐欺の被害が減ってほしい。今後は子どもを対象に、交通安全をテーマにした寸劇もやってみたい」と意欲的だ。



特殊詐欺の防止を訴える寸劇=2月、高梁市

特殊詐欺注意呼びかけ 高齢者に「防犯ヒーロー」寸劇

順正学園ボランティアセンターは、地域貢献活動として、特殊詐欺の防止を呼びかける寸劇を制作。高齢者グループの会合などで披露している。

市の職員をかたる人物から医療費還付を名目に、お金をだまし取られそうになった高齢女性を、オリジナルの防犯ヒーロー「ボランジャー」のレッドとイエローが救うストーリー。岡山県内でも特殊詐欺が多発する中、センターの学生たちが昨夏に発案し、セットも手作りした。